東方紛争録

ハズミング

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷には、大きな戦争があった。

月との戦争。

この話は、その後の、歴史から消されたもう一つの戦争。

そこに生きた、人の物語。

シロウ①

目　次

シロウ①

ドォーンドォーン。
人が死ぬ音が聞こえる。
当たり前だ。ここは、戦場。
人を殺しても罪にはならない。そんな場所にいる。
俺は、シロウ。１５だ。
ふと、空を見上げる。雲の色は黒い。しかし、夕方なので、黒と赤のグラデーションができている。
「何見てるの？」
肩を後ろから叩かれる。
「別に」
「ふぅん」
彼女は、面白くなさそうに答える。
彼女ーーーミコは、俺とミコが、解放軍に拾われるまでは、彼女の家で暮らしていた。そんなときから、彼女とは過ごしていたので、周りからは彼女だと思われているらしいが、お互いが、拾われてからもしばらくは、二人で行動していたため、長く共に過ごしすぎたためか、そこまで恋愛感情がない。
お互いのことは、異性と、あまり思ったことがない。
……。で、今俺たちは、始めての任務のために、敵の駐屯地近くに隠れて、敵の戦力の調査に来ている。今のとこは、順調だ。敵にばれてないし、ばれても、弱そうなやつから、とった、服と身分証明書を持っているから、ばれてもごまかせる。
ごまかせなかったら、「能力」で、どうにかしよう。
……。うん。
「ふーん。兵士、人数、１０００、推定。っと。」
横で、ミコは双眼鏡で駐屯地の出入りを観察している。
それを横目に、仕事に戻る。
「ねぇ、何してるの？」
背後から聞こえた、声に一瞬戸惑う。

聞いたことのない声、俺たちはバレたのかもしれない、しかし、聞こえた声は一人。もしかしたら誤魔化せるかもしれない。
冷静を装いつつ、後ろを振り向く。
びっくりした、声が男性であることはわかっていた。しかし、俺たちの後ろに居たのは、身長１８０ｃｍくらいの大男だった。目は優しく、武器らしい武器も持っていない。
「君たち、どこ担当何ですか？」
その大男は、優しく、丁寧に訊ねてきた。
「えーっと、地理調査係ですよ。ほら、地形をしってたほうが有利でしょ、」
「ふーん、俺さー、最近配属されたんだよねー、ありがとー」
そう言って、大男は立ち去った。
ハァ、ハァ、ハァ。
もうバレたのか、ヤバい、すぐにでも立ち去らなくては。
「なぁ、ミコ、早く早く、場所を移ろう。早く。」
俺はミコに急かすが、ミコは動かない。
「待ってよー、あ、クソ、見逃しちゃったじゃないのよ。」
そういって、双眼鏡を構えて何かを見ている。
「おい、何みてんだよ、貸せよ。」
強引に、双眼鏡をミコから取り、双眼鏡を構える。
どうも、男女がキスをしている。ミコはこういうのが大好きなのだ。まぁ好きなものはしょうがないが今見ることか。こう、所々が抜けているのだ。
二人は知らない、危機は迫っていることを
。